

# 子どもたちに「今起こっていること」を

「コミュタン」と呼ばれる教育施設が、福島県の三春町にあります。たくさんの子どもたちが、そこで「放射能」のこと学ぶ、そうした施設です。2016年7月にオープンしました。全体の総工費約100億円、その運営費は年間9億円とのことです。



この三春町に、写真家の飛田晋秀さんが住んでおられます。震災の時・原発が爆発した時も、ここにお住まいでした。そして、2025年の今に至るまでずっと、原発事故によって強制避難となった地域に足を運び、現地の写真を撮り続けているのが、飛田晋秀さんです。

飛田さんは、近所にできた「コミュタン」について、とても憂鬱そうにお話になります。

そこで展示していることは、“自然放射能”的ことばかり。そこの職員も、原発事故由来の放射性物質のことは「知らない」と、はっきり、言う。それで、しばらく詳しい話ををしてみると、その職員さんも「これでいいのだろうか」と、本音を語られる。「ここで働く“職員”という立場を離れて、この地に住む“親”としては、私も不安に思っている・・・」と吐露される。

環境省の参事官だった人が、東北に出向して来て、今、高校を中心に「放射能」の授業をしている。そこで「放射能は安全だ」という話が広がって行く。私はそのことに、危機感を感じているのだ。

飛田さんは、一念発起されます。「原発事故の強制避難地」をずっと見て来た自分が、子どもたちに、語らなければならないのではないか——そして、飛田さんは、2018年に献金の受け口を作り、福島県内に仲間を募り、学校で講演ができるように準備を始めました。

いよいよ、その準備が整いつつあるそうです。東北ヘルプ理事の木田牧師と私は、この夏の終わりに（いつまでも暑い今年でした！）飛田さんに、お話を伺ったのでした。

——中学・高校を主な対象に。小学生には、35分で。



という飛田さんの構想を伺い、私たちは、「小学生向け35分」の内容を、文字に残してみたいと思いました。飛田さんは、快く了解くださいました。以下に、ご紹介いたします。

(2025年11月12日 川上直哉 記)

【自己紹介。明るく、元気な挨拶といっしょに】

みなさん、こんにちは。私は飛田晋秀（ひだ・しんしゅう）といいます。福島県の三春町からきました。お城があった町です。ざる、鍋、包丁、和菓子、などなど、色々なものをつくる人が多い街でした。「なんでもそろう」町でした。

私は、そんな「物を作る人」を写真に撮る仕事をしていました。たとえば、こんな感じです。



初代が開業 1921 年(大正 10 年)三春町には十数軒あった桶屋も最後の 1 軒になってしまった。彼は第二次世界大戦の兵役から戻った 1954 年 9 月、家業を継いだ。素材にこだわり「クルミの木で味噌樽を作ると、その香りと甘みが味噌にしみこんで美味しいくなるんです」と語り、なかなか手に入りにくい木を探し回っていた。

【家畜が野生化することから話を始める】

原発事故が起きた場所は、海のそばの、双葉郡という所です。

私が住んでいるのは、山の間にある三春町。地図を、お見せしますね（スライドを説明する）。

2011年の3月15日まで、

爆発が続きました。海沿いの人々は、みんな、逃げなければならなくなりました。



地震と津波と原発事故で  
時間が止まった町の時計  
2012年1月に撮影

こおりやま広域圏 MAP

福島県三春町

原発爆発！

► 東京駅から約2時間！

郡山駅から約15分！（ともに電車の場合）

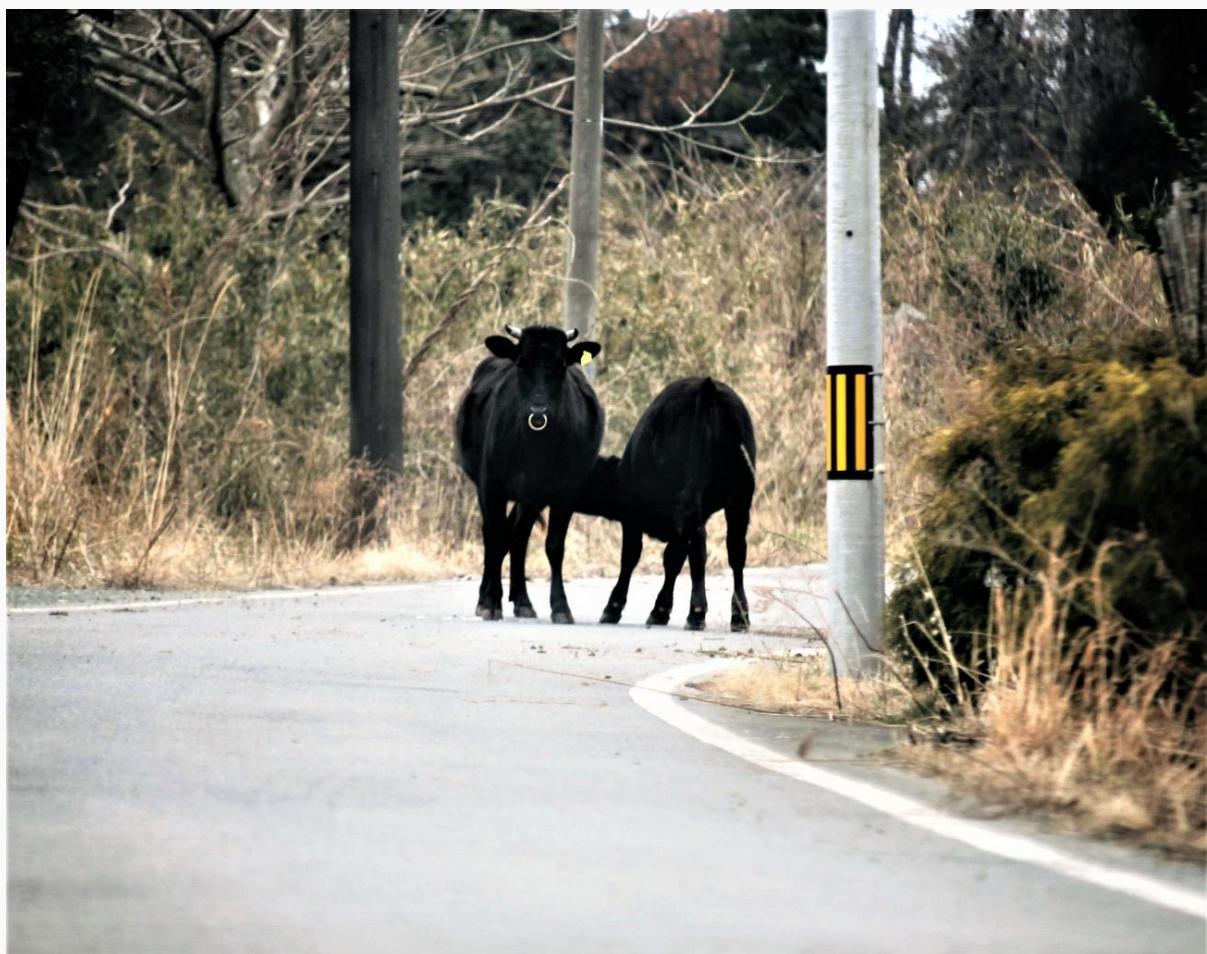
ガレキ  
約32m  
煙  
270m



「誰もいない町」が残されました。人がいなくなって、ダチョウが町を歩くようになりました。  
その他、いろいろな動物たちが、人のいない町にたくさんいるようになりました。



牛も、町に出てきました。お母さん牛は、子どもの牛を守るために、とても怖い顔をしています。近づいたら、襲ってきます。自動車でも、逃げられません。



事故から何年もたって、やっと、人間が町に戻ってきました。壊れた道路やお家を直さなければなりません。でも、そこに、たとえば、イノシシの親子がやってきます。とても、怖い。子どもを守ろうと、人間に襲いかかってきます。だから、イノシシが来たら、工事の人は、仕事を止めて、逃げることにしています。

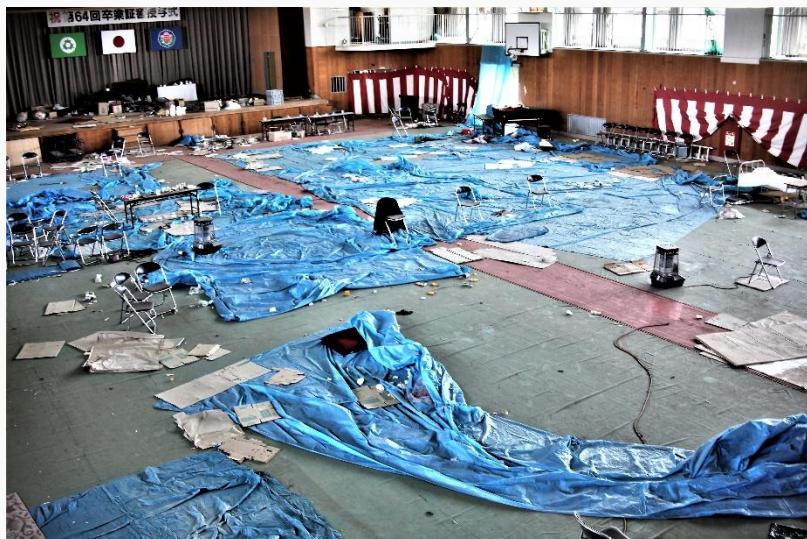


### 【原発強制避難地に行くようになって】

たくさんの人人が、大きな体育館などに、避難してきました。そのたくさんの人と、私は、お友だちになりました。

あるおじさんは、「自分の家や畠が、どうなっているか、心配だ」と言います。あるおばさんは「家を新しく建てたばかりだったの」と言います。それで、私は「じゃあ、一緒に見に行きましょう」と言いました。そして、私はずっと、人がいなくなった町に入り、写真を撮り続けています。

はじめのころ、町は本当に「逃げた時のまま」でした。そのまま、何日も・何か月も・何年も、そのままでした。散らかったまま、時間が止まつたままの建物の中を見て、「怖かったろうな」と、はっきり、感じました。  
(スライドの説明をする)



富岡中学校の卒業式が終わった後、直ぐ、避難となつた、その3年後の様子。まるで「昨日の事故」のような現場。

「タイベックス」とう特別な服を着て、危ないかどうかを確認しながら、自分の家に行くのです。でも長くはいられません。「危ない」からです。しばらくすると、呼び出しがかかります。



これは、  
建てて半年のおうちです。  
「危ない」ので戻れません。  
しょうがないので、  
新しいおうちを、また  
もうひとつ、別に  
建てるようになりました。



### 【放射能の話】

「危ない」とは、どういうことなのでしょう？何が、あぶないのでしょう？  
実は、大人たちも、はっきり、それが言えません。でも、危ない。機械で計る数字が、その「危なさ」を教えてくれます。たとえば、人のいない町に、こんな紙が貼ってありました。

平成 24 年 3 月 18 日  
原子力災害現地対策本部

原子力災害現地対策本部として下記をお伝えいたします。  
大切な個人情報ですので、各自でお持ち帰りください。

記

1. 今回の一時立入りにより受けた放射線量は、( 46 )  
マイクロシーベルトであること。  
(線量計番号： 200 )

※御参考として、日常生活で受ける放射線量を裏面に掲載していますので御覧ください。

※この線量のデータは、一巡目の一時立入りのデータと併せて、福島県が実施する「県民健康管理調査」に使用する場合があります。個人が特定されるような形で公表されることはありません。

2. スクリーニングを実施した結果は、問題ないこと。

この紙の  
ここを、見て下さい。

この数字が

**0.3**

くらいになったら、  
危ないのです。  
みんな、  
逃げなければなりません。  
原発が爆発した後、  
その数字は、

**46.0**

になったのです。  
とっても、危ない。

2012年、クリーニング検査場で、46マイクロSVの被ばくをしたことを記した書類

そして、それから今日まで、15年くらい、経ちました。  
みんなで、とっても努力して、町を直していきました。



今、こうしてきれいな町が、少しずつ、戻ってきています。

みんな、頑張っています。黄色い旗がはためいて、

「新しく、人が来てください」と言っています。

でも、やっぱり、気をつけなければいけません。

森や林の中に入ると、

## 23. 1

という数字が出ました。

## 0. 3

という数字になったら、ほんとうは、

誰でも、そこから、逃げなければならないのです。



大人たちは、みんな、こまっています。どうしてよいか、本当に、わからないです。だから、なかなか、この「本当のこと」を、みなさんにお伝え出来ないでいます。でも、大人たちは、みんな、本当に、がんばっています。でも、どうしてよいかわからなくて、なかなか、本当のことを、みんなに伝えることが出来ません。

だから、大人として、私はみなさんに、「ごめんなさい」と言います。ごめんなさい。どうしてよいか、わからないのです。でも、みんなのためにも、頑張らなければなりません。それで、お願いします。どうか、みなさん、今起こっていることを、知ってください。そして、大人たちが頑張っていることを、知ってください。そして、みんなも、勉強をして、運動をして、よく食べて、よく眠って、元気に過ごして、りっぱな大人になって下さい。そして、私たちといっしょに、本当のことを知って、時間をかけて、私たちの町を、直して行きましょう。

今日は、お話を聞いてくれて、本当に、ありがとうございました。